

私の お伊勢参り

酒本
幸祐

日本人なら一生に一度はお伊勢参りといわれている。ということでお伊勢参りに行こうと考えた。

ところが私は伊勢には二度行ったことがある。

一度目は四国の山の中の中学3年の修学旅行だった。きっとバスガイドの掲げる旗の後を、田舎者丸出しで、ぞろぞろ神宮内を歩いたのだろうが、全く記憶がない。それより海など見ることのない山の子は、二見浦の荒波の中に、注連縄を張った夫婦岩みょうといわの方が記憶に残っている。

二度目は40歳の時、全国各地の霊園を取材して廻る仕事の時だった。伊勢の霊園取材の後、内宮ないくうへ行ったという記憶はあるが、内宮については何も思

い出せない。この時は、おはらい町にあった伊勢名物の赤福本店の古い店構えの記憶がある。

伊勢に行きながら、神宮の記憶がないということは、なんと気のない参拝だったのだろう。

私は本誌の原稿を書くため、四国八十八ヶ所霊場や西国、坂東、秩父などの観音霊場を廻ってきた。ここ10年余りは各地の神社、仏閣を年3回取材と参拝を続けている。そんな中で、いつかは記憶に残る伊勢参りをと考えていた。

しかし伊勢参りは先延ばしにしてきた。というより、避けていたのかもしれない。

朝夕、自宅や会社の神棚の中央に祀っている、伊勢こうたいじんぐうの皇大神宮(内宮)のご祭神である、天照大御神あまてらすおおみかみに手を合せているののである。

このことについて自問自答を繰り返しているうち、2つの思いが浮んできた。

10年余前から神社仏閣を参拝取材しているうち、日本独自の宗教であり、奈良時代から明治維新まで連綿として続いてきた、神仏習合しんぶっしゅうごうの修験道が感覚的に合うように思えてきたのだった。そこで、かつて修験道の盛んだった社寺を選んで参拝取材をするようになった。

明治政府は中央集権と近代化を進めるため、神道を国の中心に置き、神仏分離令や修験道廃止令を

発布して、日本人の宗教観を根底から変貌させてしまった。その神道の中心として、皇室の先祖神である天照大御神を祀る皇大神宮を神社の中心としたのである。

まさに伊勢神宮は国家権力の象徴であった。戦後は信教の自由が保証されているが、近年は再び、伊勢神宮を権威付けする動きがあるように思える。

こんな思いが、権威や体制、主流といったことから、真逆の生き方をしてきた私にとって、伊勢参りを躊躇させてきたのかもしれない。

私の生き方は、望んでのものではないが、造り酒屋が潰れてから二代目の分家筋は、悲哀でしかなく、この環境が反骨者として育てたのだろう。

大阪の高校に進んでからは小説家になりたいと、ほとんど勉強はせず、文芸書を乱読していた。肌に合ったのか、無頼派といわれていた太宰治、織田作之助、坂口安吾などの作品を好んで読んだ。特に坂口安吾には傾倒した。その他、直木賞を断った山本周五郎の反骨と、市井の情の機微を描いた小説が好きだった。

小説家を目指すなら東京に行くしかない、20歳の時、小さな出版社にもぐり込んだ。

当時の編集者は、編集屋といった感じで職人氣質の人が多かった。上司になった人などは、アルコール中毒で、入社してきた時は指先が震えているが、机の引き出しから安いウイスキーを湯飲みに注いで、一気に飲むと震えが止まった。夜は居酒屋へといった感じで、それにつき合っているうち、これで小説が書けるのだろうか不安になった。

そんな時、大阪の友人がカナダへ行くといってきた。この環境を変えるため、出版社を1年余でやめ、インドへの密出国を企てた。この経緯は紙面の都合で書けないが見事に失敗した。

その後、人縁地縁もない下関の小さな出版社へ流されるように移った。ここで世帯をもって5年間暮らし、一女一男が生まれたが、どうしても下関にはなじめず、30歳前に再び上京した。無謀を絵に描いたような生き方は、家族には大迷惑だっただろう。

30歳の時、本を訪問販売していた男と知り合い、売るのは任せろ、いい本を作ってくれと誘われて、今の出版社を創った。男は半年ほどでやめてしまい、一人で編集、販売を頑張ったが、1年で印刷屋

が印刷を受けてくれなくなった。結局、1200万円ほどの借金が残っていた。初めての大きな借金に膝がガクガク震えたのを憶えている。

組織もなく組織に属さず、名もなく金もなく、借金返済に奮闘した。野良犬が餌を求めて彷徨うといった感じだ。情の餌には助けられたが、不正な餌は食べなかったし、毒も食べなかった。

時として体制や主流は、やさしい顔をして傲慢さを押し付けてくる。この屈辱には反骨魂を燃え上がらせて対抗した。こんな時、強く感じたことは、体制、主流に対しては、小といえども毅然として正論を通して媚びない。時として刺違えるくらいの覚悟を持つ。そして義理は欠かず情を忘れないということだった。

借金を返済して、30歳の半を過ぎ、やや波は静かになったが、よく生き延びたものだと思う。

前述のようなことを考えている時、伊勢市観光協会から資料を送ってもらったものの、日延びが続き、やっと宿を予約したことで決断がついた。すると、毎日手を合せている神様なんだから、素直な気持ちで行けばいいと思うようになり、気が楽になった。さほどにお伊勢参りは、私にとって敷居の高いものだった。

今回は伊勢の神々とじっくりと向き合いたいとの思いから、3泊4日の予定で、最後に二見浦に廻って帰ることにした。

事前の簡単な下調べでは、^{げくう}外宮の^{とようけたいじんくう}豊受大神宮から参拝し、^{こうたいじんくう}内宮の皇大神宮へ参るのが正しいとのこと、今回は外宮から内宮に向う途中にある^{やまとひめくう}倭姫宮、^{つきよみくう}月読宮を参拝、翌日に内宮へ参拝し、翌々日に二見浦の夫婦岩を見て帰ることを考えていた。

4月4日、東京駅発12時30分の「のぞみ」に乗った。西から雨模様の予報はあったが、曇天のなかの出発だった。新幹線の車中であっても、伊勢の神々に対してのモヤモヤは消えず、神々はどう迎えてくれるのだろう、無事に帰れるのかと一抹の不安は消えないまま、新幹線は西へと走り続けた。

名古屋から快速みえ号に乗り継ぎ、予定通りにJR伊勢市駅に5時前に着いた。外は細かい雨が降っていて薄暗かった。宿は外宮に一番近いところを予約していて、歩いて10分ほどだったが、傘もなく駅前からタクシーに乗った。



伊勢神宮・外宮。表参道より火除橋の先に広い境内があり、その奥の深い森の入口に建つ鳥居。ここから外宮正宮へとつづく。

宿の名前を運転手に伝えると、一瞬げんな表情を見せてから車を走らせた。宿の前に車を止めた運転手は「ここですよ。ここ」と指を差した。ここから、この宿での哀愁が始まった。

玄関を入ると、靴を脱ぎ上がる一段高いロビーがあり、右側に箱形に区切った古風な帳場があった。見るからに戦前を思わせる超レトロな気配があった。一応コロナ対策で検温、手の消毒薬は置いていて、奥に声を掛けると、70歳半と思える小太りの老婦人が出てきた。「酒本さんですか。いらっしゃい」と、どうやら宿の女将のようだった。しかし身なりはどこにもいる老婆そのもので、歩行もヨタヨタしていた。

2階の部屋に案内してくれた。階段は改修したのだろう幅広のしっかりしたものだった。ところが2階の廊下は古色然として軋み、上層階への階段はプラスチックの鎖で封鎖していた。

通された部屋は8畳ほどの和室で、奥の窓を潰した壁際に狭い板敷があり、古い洗面台があった。床の間には銘木であろう黒光りする床柱があり、建築当時はさぞ一流といわれる旅館だったのだろうが、老朽化が進み、はるか時代にとり残された感があった。

天井から吊るされた明るさの弱い蛍光灯の下で、小さな座卓を前に、テレビを見ていると「風呂が沸きました」と女将の声が聞こえた。急がせるように、部屋と廊下を隔てた反対側の風呂場に案内した。「ここが風呂、ここがトイレ」と教えると戻っていった。

風呂場に入ると小さな脱衣場、その先に小さな家庭用の浴槽があり、半分ほどの湯に緑色の入浴剤が入っていた。胸まで湯に浸かりながら、随分とひどい宿に当たったものだと思った。

風呂を出ると、「食事の用意ができました」と女将の声がした。空いている隣の部屋の小さな座卓に、食事が並べていた。旅館らしく小皿に10種ほどの食べ物と並んでいたが、作り置けるものが多かった。



外宮正宮。板垣入口の鳥居の先に拜礼所があり、そこまで入って参拜できる。撮影はここまでである。

女将が来たので「老舗の宿なんですね」というと「昭和3年からやらせてもらってます」と答えた。「ところで今夜の泊りは私一人ですか」と聞くと、平然として「ええ、そうです」と言った。声はしっかりしていて、その話し振りは、かつてこの宿をテキパキと切り盛りしていた女将の片鱗がうかがえた。

一人で食事をしながら、一人のために食事を作り、風呂を沸かしてくれたことを思うと、しみじみと哀愁を感じ、一本の中瓶ビールをチビチビ舐めるように味わった。

部屋に戻ると壁際に敷かれた布団が、ロール状に丸めてあった。広げて寝なさいということだろうと、早々に布団に入り早い眠りについた。

翌朝、9時前に玄関に下りると、気の弱そうな旦那が帳場の中にいて、請求書を出しながら「うちはカードは使えないので現金でお願いします」といった。支払いながら「ご主人で何代目ですか」と問うと「駄目な三代目なんです」と自嘲気味に答えた。

宿を出る時、老夫婦が「よいお参りを」と送り出してくれた。外は快晴だった。

外宮に一番近い宿を選んだだけに、外宮入口までは5分かからなかった。伊勢市駅側から続く表参道から入っていった。表参道の火除橋の前は大きな広場になっていて、神域という感じはなかったが、橋の先の鳥居に入ると、幅の広い参道の左右は自然林が広がり、砂利を踏みながら進むほどに、神域であることを実感した。

200mほど進むと右側に神楽殿があり、そのまま進むと、右側に前回の遷宮まで正宮があった古殿地があり、



外宮・古殿地。前回の遷宮までこの地に正宮・正殿があった。



御幸道路に面して、倭姫宮への参道がある。倭姫宮の石柱と鳥居が建っている。



深い森に囲まれて建てられた倭姫宮。神宮の別宮の建築様式は、どの別宮ともよく似ている。柵の手前が古殿地である。

その隣の奥に板垣に囲まれた豊受大神宮正宮があった。

参拝は板垣を入った外玉垣南

御門まで許されていて、ここから正宮に向って拝礼した。外玉垣の内側はこぶしほどの白玉石が敷きつめられ、その奥に二重の玉垣があり、その奥正殿は見ることができない。

豊受大神宮は天照大御神の食事を司る豊受大神が祀られていて、現在も毎日天照大御神の食事が作られている。内宮創建500年後に、ここ山田原に迎えられたといわれている。また豊受大神は、衣食住をはじめ、あらゆる産業の守神とされ、多くの庶民に信仰され、江戸期には内宮より外宮の方が人気があったといわれている。

私も伊勢神宮参拝を報告し、世の衣食住の充足を願い、産業の発展を願って深く一礼した。決して個人的な願いはしなかった。

さすが伊勢神宮への参拝者は多く、次々と訪れていた。

1時間半ほどで表参道から外宮を出て、内宮に向う途中にある別宮、倭姫宮、月読宮へ向うことにした。

伊勢神宮には皇大神宮、豊受大神宮の他、別宮、摂社、末社、所管社を含めた125の宮社があり、総称して伊勢神宮という。この中で別宮は14宮である。別宮の全て参拝は無理で2宮となった。

観光案内所で教えられた路線バスで、神宮徴古館前で下車、この道路は内宮に向う道で、道路を跨いで大きな鳥居が建っていた。

倭姫宮は道路を渡った森の入口に鳥居があり、倭姫宮との石柱が建っていた。

鳥居を入ると幅3mほどの参道は、薄暗いほどに木々に覆われていて、砂利敷の参道は落葉が多く、砂利と落葉を踏んで歩くと不思議な感触があった。360mほど進むと30段ほどの石階段があり、その上の境内の奥に、倭姫を祀る宮があった。

倭姫は第11代垂仁天皇の皇女で、現在の皇大神宮を創建されたといわれている。

初代神武天皇以来、天照大御神は皇居内に祀られていたが、10代崇神天皇の御代に皇居の外

で祀ることになり、皇女・豊^{とよすき}^{いりひめ}^{かさいむら}入^{むら}姫が大和の笠縫邑に神籬を建て天照大御神を祀られた。その後、豊^{とよすき}入^{むら}姫に代り、倭姫がより最適な地を求めて各地を廻り、伊勢の現在の地に到っている。

倭姫が各地を廻り、天照大御神のご神体である八^{やち}咫^{また}の鏡を順次奉斎した地は、伊賀、近江、美濃、尾張の諸国にわたり、元伊勢と呼ばれている。

倭姫が伊勢の地に到った時、天照大御神が倭姫に教えられたことが『日本書紀』にある。要約すると「伊勢は常世の国からの波が何重も寄り来る国であり、辺境ではあるが美しい国なのでこの国に鎮座しよう」との意味になる。

倭姫を祀る宮は深い森に囲まれ、伊勢神宮の別宮に共通した独自の建築様式である。私自身をも、伊勢に導いてくれたことに感謝して拝礼した。

再び先の道路に出た。この道を直進すれば内宮の正面に通じていて「御幸道路」と呼ばれている。このまま進めば、左側に別宮の月読宮があり、こゝも訪ねる予定にしていた。

バスに乗る方法もあったが、外宮と内宮の間は5キロほどと聞いていて、すでに2キロほどは来ていて、便数の少ないバスを待つより、好天でもあり歩くことにした。また道路の随所に桜が植えられていて、散りはじめた桜も旅情を誘った。

歩きながら景色を眺めていると、伊勢には高山はなく、丸味をおびてゆるやかな稜線をもつ、小山や山塊が点在していて、その間に水田や畑が広がるといった感じで、空が大きく広がっている。天照大御神が教えた通り、美しい国だと思った。

近鉄電車の線路を潜って進むと、左側に月読宮があるはずだった。しかし案内板もなく、通行人に尋ねると、「そこだ」と指を差したのが、木々に覆われた小高い山だった。横まで行ったが入口すら分からなかった。山に接する形で大駐車場があり、2階

建の大きな建物があったので尋ねに行ったが、そこはセレモニーホールだった。聞きづらくて、もう少し歩いてみようとして道路を進んだ。すると小山を回り込んだ所に、鳥居と「月読宮」の石柱が建っていた。

山頂部に月読宮があるらしく、登り勾配の参道で、倭姫宮同様に木々に覆われていた。300 mほどで右側に小さな宿衛屋しゆくゑい(一般的な神社の社務所に当る)があり、その奥に宮があった。

月読命つきよみのみこと(月読宮では月読尊と表記している)は、黄泉国から戻った伊邪那岐神が、筑紫の日向の橘の小門あはぎほらの阿波岐原で禊をした際に、右眼をすすいだ時に生まれた神である。ちなみに左眼をすすいだ時に生まれたのが天照大御神で、鼻をすすいだ時に生まれたのが須佐之男命で、この三神は三貴子と称されている。

月読尊は月の神で、夜を統治する神である。神名通り月を読む神で、月齢、すなわち暦を読むことで、農耕の神、漁業の神とされている。種まきなど農耕や、魚の産卵期などは月齢で読む陰暦が重要視されている。また月は海との関係も深く、潮の干満は月と地球の引力で起きている。

宿衛屋の前を通り過ぎると、正面に4棟の全く同じ宮が見えた。それぞれの宮にお祀りされている祭神名がないので、月読尊の宮はどれなのかとまどってしまった。ガイドブックには月読宮と表記されているので、1棟の宮だと思い込んでいた。仕方ないので端の宮から順に拝礼していった。

4棟の宮も森に囲まれて鎮座されていて、外宮からこれまで参拝した伊勢の宮は、威圧というのではなく、やさしく温かいものを感じた。

参拝を終えて宿衛屋に寄って、4棟の宮について質問した。すると4棟の宮は向って左より伊佐奈彌宮いざなみ、伊佐那岐宮いざなぎ、月読宮つきよみ、月読荒御魂宮つきよみあらみたまと呼ばれ、それぞれ宮の名前の神が祀られていると教えてくれた。すなわち月読宮には外宮内宮合せて14の別宮のうち、ここに4の別宮があるということで、4棟ある疑問が解消した。

ところで三貴子と称される須佐之男命は14ある別宮の中にないのである。

須佐之男命は海原の統治を命じられるが、一向に守らず、高天原の天照大御神を訪ね悪逆非道の限りをつくした。そこで高天原の神々から爪を剥れ、髭



倭姫宮から月読宮への御幸道路の随所に桜並木があり、散りはじめた桜が伊勢路を印象づけた。

を抜かれ高天原を追放される。その後、善神となって八俣大蛇を鎮めやまたのおろち(暴れ川を改修)出雲国を治めるのだが、高天原での悪逆非道な行いがあってのためか、伊勢神宮では祀られていない。神々の世界でも許されることはないのだろうか。

月読宮を出て再び御幸道路を進んだ。少々足が疲れて、道路脇の花壇の縁に座ったり、歩行速度は落ちてきた。しばらく行くと右側に猿田彦神社の大きな看板が見えた。猿田彦神はさるたひこじんじや邇邇芸命が高千穂の峰に降臨した時に導いた神である。2度目に伊勢に来た時、偶然通りがかり参拝したことがある。今回も参拝できればと思っていたが、どこにあったのか記憶になく諦めていた。その猿田彦神社があったので、これもお導きと喜んで参拝に行った。

境内に入ると少し記憶が蘇ってきて、懐かしく思えた。

猿田彦神社を出て、時計を見ると3時半を過ぎていた。空腹もあって、通りにあった「伊勢うどん」の店に入った。食べたことはなかったが、伊勢名物として知られている。出てきたうどんを見て驚いた。汁がないのだ。丼の底に味の濃い黒々としたタレがあり、それをうどんに絡めて食べるらしい。太くて異様にやわらかい麺は、何とも違和感があった。一般的なうどんとは似て非なる食べ物だった。空腹もあって残さず食べたが、もう一度食べたいとは思わなかった。

今夜の宿である神宮会館を店の者に聞くと、「前の道を行けば10分ほどです」といった。少し早いが4時過ぎには着けそうだった。

この神宮会館も、伊勢市観光協会のガイドに記載されていた。名前からして、寺院でいう宿坊のようなものだと思っていた。

遠くに伊勢神宮内宮前の鳥居が小さく見えてくると、右側に神宮会館があった。4階建てで、ビルの感じの建物が2棟並んであった。外観は何の装飾もなく、事務所的な印象だった。



木が繁る小山の入口に、月読宮の石柱と鳥居が建っている。



月読宮には4つの別宮があり同じ建築様式の宮が4棟ならんでいる。左より伊佐奈彌宮、伊佐那岐宮、月読宮、月読荒御魂宮である。左側に古殿地がある。

宿として神宮会館に決めたのは、希望すれば内宮への早朝参拝ができると書いていて、こんな機会が得難いと思ったからだった。

自動ドアの玄関に入ると、予想は一変した。絨毯が敷かれ、ホテル並のフロント、ロビーだった。職員の対応が気持ちよく、通された部屋も明るくきれいだった。大浴場も広く立派で、清潔だった。

何よりも食事は品数も多く、工夫された献立で、昨晚の宿のこともあるせいか嬉しくなった。伊勢参拝で、内宮近くで宿泊するのであれば、大いに推奨できる宿である。

この宿の経営は伊勢神宮崇敬会であり、全国から来るであろう伊勢神宮参拝者へのおもてなしの心が伝わってきた。

翌朝6時30分、早朝参拝者がロビーに集合した。参加者は12、3人だった。会館のスーツの制服を着た30歳くらいの女性職員の見導で、内宮に向かった。

会館から内宮入口の宇治橋までは300mほどだった。宇治橋を前にして、職員を囲む形で説明を聞いた。例えば、橋の手前に建つ大鳥居は、前回の式年遷宮まで、外宮の御正殿の棟持柱だったものを使っていて、奥の鳥居は内宮御正殿の棟持柱である。橋の欄干は宮大工が作り、歩行する所は船大工が作る。そして宇治橋も式年遷宮に合わせて掛け替えられる。などなど実に詳しい説明があり、このように宇治橋を渡り内宮の各所を参拝しながら、約1.5キロほど、随所でしてくれた。

これら全てを書くこともできないので、参拝の要である内宮御正宮への道すがらを紹介する。

早朝とあって澄んだ空気が感じられ、すがすがしい気分だった。一般の参拝者もまばらで、何か得をしたようにも思えた。

先導してくれる女性は小柄なのだが、歩行速度が実に早い。宇治橋を渡って、広々として手入れの行

き届いた神苑は平坦であるが、奥の火除橋を過ぎ森に入ると、階段も多く高低差があった。ともかく遅れず歩くことが大変だった。

森に入ってすぐの所に、山中から流れ出る清流五十鈴川手洗場があり、川辺まで下りて行けるようになっていた。この先は各所で参拝しながら、天照大御神をお祀りする内宮正宮下に着いた。

正宮は幅広くきれいに切り揃えられた30段ほどの石階段の上に在り、板垣南御門を仰ぎ見ることができた。撮影はここまでであった。石階段下で正宮を見上げながら佇んでいた。正月に総理大臣などが随行者を供って、石階段下を歩く姿をテレビで見たことがあるが、こうして正宮下に立ってみると印象が異なっている。肌に伝わる気温を感じ、風を感じ、ことさら神を意識するのではなく、その場の自然のまま、自然とともに在るといった感覚があった。

一歩一歩ゆっくりと石階段を上がり、作法通りに手を合せ、伊勢参拝の報告をした。何を感じるのでもなく、穏やか気持ちで参拝することができた。

正宮参拝から少し戻り、荒祭宮へ向った。荒祭宮は正殿にお祀りされている天照大御神の和魂あらかみたまに対して、荒魂あらかたまをお祀りする宮で、より神威が強く表われる宮である。



御幸道路を少し入った所に、伊勢神宮とも神縁深い猿田彦神社があった。



伊勢神宮・内宮への入口には五十鈴川にかかる宇治橋があり、大きな鳥居が印象的だ。この橋を渡ると、伊勢神宮参拝との思いが強くなる。



宇治橋を渡るとよく手入れされた神苑が広がっている。広い参道は内宮の森へとつづいている。右側の松の植栽の中には大正天皇お手植の松もある。

荒祭宮への参道は登り坂になるが、その途中に御稲御倉という建物があった。これは稲を保管する倉だそうで、高床式で皇大神宮正殿の形そのまま、5分の1の大きさに建てられていると聞いた。正殿は見ることができないので、正殿をイメージすることができる。

荒祭宮は正宮同様に石階段の上に建っているが、石階段は荒々しく感じた。建物の様式も異なり、こちらは拝殿からの撮影も許されていた。気持ちのせいか、神威という気を感じるように思えた。

順拝を続け、再び五十鈴手洗場に戻り、宇治橋を渡り、午前8時に神宮会館に帰った。帰路、先導してくれた職員の説明が、あまりにも詳しいのでそのことを聞くと、神宮で巫女をしていたのだといった。神宮では巫女は5年しかできないのだといった。

歩いた距離は約2キロ強、1時間30分のハードな早朝参拝だった。

午前10時前に神宮会館を出た。内宮の参拝は終わったのだが、今度は一人で、再び早朝参拝と同じ道順を自分のペースで廻ることにした。早朝参拝で先導してくれた女性職員の言葉を思い出しながら、一步一步と大地を踏み、時々立ち止まって風を感じ、気を感じ、五感で内宮の森を感じようと思っていた。朝のグループでの参拝にはなかった、落ち着いた空気を味わうことができた。

早朝参拝にはカメラを持たず参加したので、ここで使用している写真は二度目の参拝時のもので、この時は、若干参拝者が増えてきたが、内宮の森の静けさを失うということにはなかった。それほど内宮の森は広大で、深い森の中にあるということだろう。残念だったのは、宇治橋周辺は、朝は閑散としていたのだが、二度目の時の宇治橋前は、修学旅行の団体や、多くの参拝者で大賑わいだった。

ゆっくりと内宮の森を歩いていると、最初は伊勢



神宮の森に入ってすぐの所に、五十鈴川辺に手洗場があり、手を洗う人が多い。

神宮に対し素直になれなかった気持ちちは消え、神という存在を感じるのでもなく、内宮の森という大自然の中に同化してい

く、そんな感覚があった。神の存在とはこのようなものなのだろうか。

早朝参拝と同じコースを2時間ほどかけて廻ったが、早朝参拝では気付かなかったことが見えたり、参道を囲む木々の表情が分かったりと、続けて二度廻ることができたのは、本当にありがたく思いながら、宇治橋まで戻ってきた。

伊勢神宮といえば、誰もが最初に式年遷宮のことを思い出すのではないだろうか。20年毎の式年遷宮の年は、広くニュースとして報じられ、式典は映像としても放映されている。

この式年遷宮は飛鳥時代の天武天皇が定め、第1回が持統天皇4年(690年)に行われて以来、戦国時代の120年余の中断や、何度かの延期はあったものの、およそ1300年にわたり行われている。直近に行われたのが平成25年の第62回式年遷宮である。

式年遷宮では内、外宮の正宮正殿、14ある別宮の正殿を造り替えて、神座を遷し、宝殿、外幣殿、鳥居、御垣、御饌殿など65棟の舎殿も造り替えるという。宇治橋もこの時に造り替えるという。神宮に125社あるこれ以外の宮は、20年毎に修繕し、40年で造り替えられると聞いた。

この遷宮にともなう用材は膨大な量で、これらの檜の用材は、第1回の遷宮以来、神宮が所有している神宮宮域林の広大な森から調達してきたが、現在では木曽の国有林の檜で賄っている。宮域林では用材の自給を目指して200年計画で造林、育成が進め



伊勢神宮・内宮の正宮。階段下から仰ぎ見る感じだ。森と一体となった正宮は、やさしさを感じる。参拝は階段上の拝所で行えるが、撮影はここまでだった。

られているという。

この他、神饌の稲は神宮神田で、野菜果物は神宮御園で栽培されたものが使われている。塩は御塩浜で採った海水を御塩吸入所に運び、御塩焼所で焼き上げられ荒塩となる。

また神饌のアワビや千鯛もそれぞれの調製所で調製されている。このように神饌のすべてが神宮内で調達されている。この他には神宮で使われる土器も神宮土器調製所で作られているという。これら神宮の神々に奉仕する人員は、神職約100名一般職員約500名と聞いた。

内宮を続けて二順する参拝が終った。このような参拝は初の経験であり、今後もないだろうと思った。少々疲れた感があったが、心の中は爽やかな風が吹き抜けたような思いがあった。

午後1時前で、今夜の宿の二見浦までは充分時間があ、伊勢参拝のほとんどの人が訪ねると、「おはらい町」「おかげ横丁」を散策することにして、宇治橋の大鳥居越しに神宮の森に一礼した。

おはらい町は宇治橋前の広場から、五鈴川沿いに歩くと、すぐ入口があった。通りは800mほどで、石畳の道の左右には、江戸時代の家並を再現した店が軒を連ね、情緒ある通りになっていた。店のほとんどが食事処や土産物店であるが、特に目に付く



荒祭宮へ向う途中に、御稲御倉がある。この建物は内宮正殿の5分の1の大きさに建てられている。



荒祭宮の階段下から正宮を見る。荒祭宮は天照大御神の荒御魂が祀られている。建築様式も正宮とは異なっていて、雰囲気も異なっている。階段を上がって参拝でき、写真撮影も自由であった。

のが「伊勢うどん」と染めた暖簾の多さだった。道幅もさほど広くないため、通りは祭のような雰囲気だった。

真中あたりまで進むと、右角に江戸時代からここに建っていたかと思わせる古風な建物があった。ここが伊勢の御福餅として知られる赤福本店だった。店内で食べようと店頭には長い列ができていた。

赤福本店前を左に入った一角がおかげ横丁だった。おかげ横丁は通りではなく、4000坪ほどの敷地の中に、食事処や土産物店が並んでいて、おはらい町とほとんど同じ雰囲気だった。

歩き疲れて空腹でもあり、何かと思っても、ここには飲物の自販機もなければ、ハンバーガーのようなものもない。甘味処が伊勢うどんだけであった。なにより店に入らなければ、座って休憩するところもなかった。

仕方なく二度と食べないと思っていた伊勢うどんの店に入った。店が違えば少しは違うかと、一人言をいながらであったが、半分ほど残して丼を置いた。

1時間半ほど散策して、宇治橋前の広場まで戻った。広場は変わらず賑わっていた。この広場前から二見浦へのバスに乗る予定だった。バスは1時間に1便と聞いていたので、ともかくバス停に向った。

バス停には小さな木造の建物があり、切符を売るバス会社の社員もいて、小さな売店が2軒入っていた。

今夜の宿で聞いていた「表参道」というバス停まで切符を買った。この時は、なぜ表参道なのかと思っていたが、翌日その理由が分かった。次のバスまでは30分余りあり、売店で缶ビールを買って、建物の前のベンチで飲んだ。体が少し元気になったようだった。

今夜の宿は「二見キャッスルホテルイン伊勢夫婦岩」という長い名前のホテルだった。このホテルになったのは、伊勢市観光協会の資料には、隣り町の



おはらい町の通り 左右に江戸時代を再現した建物が並び、華やいた雰囲気をかもしている。



おかげ横丁は、平成5年に、おはらい町に接して造られたもので、通りではなく、広い敷地の中にある。



伊勢名物「赤福」の本店。古風な建物が印象的だ。

二見町の宿は載ってなく、二見浦旅館組合に電話したことだった。電話にでたのは女性で、声からして50～60歳くらいの感じだった。旅館の紹介を頼んで、泊り客が一人と聞くと急に対応が悪くなり、「二見浦の宿では一人客は嫌がれるんです」といい、ビジネスホテルを教えますと、このホテルの電話番号を教えてくれたのだった。そこが今夜の宿だった。

二見浦行きのバスは私一人を乗せて出発した。内宮前を離れると、すぐ田畑が一面に広がり、遠くに丸味をおびた山塊が連なる伊勢特有の風景があった。昨日も思ったのだが、本当に伊勢の風景はのどかで美しかった。乗車してくる客もなく、バスはほぼノンストップで表参道バス停に到着した。30分ほどであった。

表参道バス停も内宮前同様に、木造の建物がああり、小さな売店に70歳は越しているだろう老婦人がいた。ホテルを尋ねると、指差して教えてくれた。この辺りは2階建ほどの家並みで、その先に10階建だというのが、あまり大きくはないホテルが見え

た。「この道を行けば10分ほどで着きますよ」と建物の横の道を教えてくれた。

歩き始めてすぐ、道がよく整備されていることに気付いた。真中に二車線ほどの車道があり、左右にインターロッキングで舗装された歩道があった。道に沿って家が連なっているのだが、普通の民家だった。100mほど進むと道が右に90度曲り、そこから道沿いに、2階や3階建ての板塀に囲まれた立派な家が並んでいた。個人住宅にしては立派だと思いつつながら注意して眺めると、家の形から昔に二見浦に来た人の旅館なのだろうと思えた。戦前戦後の典型的な日本旅館が、そのまま時代の流れの中で取り残されたのだろう。今は営業してる風には見えなかった。

道を歩いているのは私一人で、行き合う人もいない、静かすぎる家並だった。

しばらく行くと、右側に「蛸めし」と書いたのぼりがある食堂があったが、店の中は暗く、休憩中なのだろう。

二見キャッスルホテルに着いた。ホテル前には広い駐車場があった。現在では多くの人が車で移動するため、駐車場は宿泊条件となっているのだろう。

ホテルは新しいもので、ビジネスホテルと観光ホテルを兼ねた感じだった。予約した時には、夕食はホテル内にレストランがあると聞いていたのだが、この日は臨時休業とのことだった。この辺りには食事できる所はないと聞かされ、ホテルに来る途中にあった蛸めし食堂のことを尋ねると、フロントの女性が電話で聞いてくれた。「簡単な食事と焼酎は大丈夫です」とのことと、それで充分と夕食は確保した。

蛸めし食堂で、蛸刺で焼酎を飲んでいると、熟年夫婦が店に来て、横のテーブルに座った。福岡から来たという、この夫婦も私と同じホテルに泊まって



二見浦へ続く松の防風林、海側には防波堤を兼ねる遊歩道が、夫婦岩へと続いている。この地らしい、のどかな風景がある。



二見浦の興玉神社の鳥居。鳥居をくぐり境内を進むと夫婦岩が見え、興玉神社の社殿がある。海からの風がたえず吹いている。



荒磯の先にある夫婦岩。おだやかな日も、太平洋の波はたえず寄せてくる。

だと気づき、表参道という意味を理解した。もう少し進むと参道が終り、

砂を敷いた奥に長い広場があり、石の鳥居が見えた。どうやら神社の境内に入ったようだった。この神社は、^{ふたみおきたまじんじや}二見興玉神社で、鳥居の横に由緒を示す木札が掲げられていた。

要約すると、「祭神は^{ざるたひこのかみ}猿田彦大神、^{うがのおみたまおおかみ}宇迦御魂大神の二柱。垂仁天皇の御代、皇女倭姫命が天照皇大神の神霊を奉戴して二見浦に船を停め、神縁深い猿田彦大神出現の神跡である興玉石(夫婦岩)を敬拝し、注連縄を張り拜所を設けた。その後、僧・行基が興玉社を創建した」とあった。

興玉神社のことは知らなかったもので、ここが倭姫とも縁があり、猿田彦神と再び会えるとも思っていなかっただけに、驚きと嬉しさがあった。

境内に入ると、夫婦岩を見に来た家族連れや観光客の姿がパラパラとあった。境内は細長く岩場に沿って湾曲していて、海からの風も強くなり、境内下の岩場に打ち突ける波音が高くなった。進むほどに夫婦岩が大きく見えはじめ、境内の奥に興玉神社の社殿があった。

社殿で参拝して奥に進もうとしたが、社殿海側の通路には柵がしてあり、通行禁止の表示があった。

修学旅行で来た時は、観光用ポスターなどのように、正面から眺めたように思うが、今は特別な許可が必要なのだろうか。残念ながら夫婦岩を左前方から眺めるしかなかった。

社殿下の海岸から運んできたような、ゴツゴツした岩を積んで造られた垣に手を置いて、海に浮かぶ夫婦岩を眺め続けた。昨晚の熟年夫婦との会話を思ったり、波に打たれる夫婦岩を見ていると、悪戦苦闘していた頃の自分の姿が重なったりしたが、注連縄を張ってもらえるような立派な仕



興玉神社・社殿。

いて、夕食を探してきたといった。客は三人だけで、何となく話ははずんだ。

私が二見浦に来る前、友人から、「夫婦岩は大正時代に波が打ち突けて、どちらかの岩が折れて海中に沈んだが、それを引き上げ復元したのだ」と聞いていて、その話をした。友人は、「夫婦円満のシンボルといえども、片方が折れたり復元したりと、軋みながら在る姿は人間の夫婦とよく似ている」ともいっていた。

この会話を聞いていた食堂の娘なのか、息子の嫁なのか、50歳前後の婦人が、「折れた岩は、そのまま神の岩として海底にあります。別の岩で復元したのです」と異を唱えた。また折れた岩は、大きい方の夫の岩だと教えてくれた。

夫婦岩の話で盛り上がり、適度に酔って、好天に恵まれて、伊勢参拝3日目が終わった。

翌朝も朝陽が眩しいほどの好天だった。午前9時にホテルを出る時、夫婦岩への道を尋ねると、ホテル横の松の防風林の海側の遊歩道を行けば、10分ほどで着くと教えてくれた。偶然だったが、ホテルは表参道のバス停と、夫婦岩の中間にあったのだ。

ホテルは海際にあったが、よく育っている防風林で海が見えなかった。駐車場から1段下がった防風林に入ると、波音が聞こえ、その先に、防波堤を兼ねた遊歩道があった。

防波堤に立つと、やや冷たい風が海から絶えず吹いていた。広い空と目前に広がる海、変哲のない景色が、すごく美しいと思った。

遊歩道を200mほど進むと、右側の防風林は参道の松並木にかわり、ここから参道を歩くことにした。

参道には陸側だけ海に面して、旅館、土産物店、食事処らしい建物が軒を連ねていたが、どこも営業していなかった。人影のない参道を歩きながら、昨日バスを下りた表参道から、この道へ続いているの



JR二見浦駅前建つ大鳥居。その奥に夫婦岩を模した駅舎がある。昔は大いに賑わった駅だろうが、今は無人駅となっている。



二見浦駅のホーム。春の日の景色の中に取り残された感があつた。ホーム中央に設けられているベンチが往時をしる。

事はしていないと苦笑したりした。

それにしても海からの風が冷たかった。いつも旅行に出る時に用意する、ポケット瓶のウイスキーをリュックから出して、瓶の口から唇を湿らせるようにして飲んだ。

夫婦岩や荒磯に打ち突ける波を見ていると、一波一波大きさが異なり、白く泡立つ波頭の形も異なる。波は一波一波が新しいのだと、連綿と続く世の流を思った。そんなことを思っている時、「思えば遠くに来たものだ」と歌詩が浮かんできた。さてこれから、神々はどこへ連れていってくれるのだろう。

ホテルを出て1時間ほどだが、座る所がなく、立ち続けることは、疲れた足にはきつかった。そろそろ帰ることにしようと、興玉神社の社殿に一礼して境内を出た。

先ほどの参道を戻れば、昨日の表参道バス停に着くことは頭の中で描けていた。帰路はJR二見浦駅からと考えていたのだが、表参道バス停から駅までのルートが分からなかった。ともかく途中で出会った人に聞けばいいと思っていた。

参道は海側から陸側に大きく曲がり、古風な木造の旅館街に入った。往時は夫婦岩見物の客で賑わったのだろうが、静かで淋しい通りだった。その通りで水道の検針をしている婦人と会い、駅への道順を尋ねた。その説明によると、表参道バス停の大通りを、昨日きた道に戻るように入ると、左側に幅の広い通りがあり、その突き当りだった。バス停から20分ほどだとも聞いた。するとホテルまで10分、そこからバス停まで10分、それから20分なら40分で着ける。足のことを考えても、1時間あれば大丈夫と計算した。なにより、いつも旅に携えている金剛杖が心強かった。

ほぼ予定通りで二見浦駅入口に着いた。広々とした駅前には、大きな鉄製の鳥居が建ち、その奥に夫



車窓からの風景。伊勢周辺ののどかさが感じられる。

婦岩を模した立派な駅舎が見えた。さすが観光名所の二見浦との思いで駅舎に入ったが、ガラー

ンとしていて、誰一人いない。切符売場も封鎖されていた。駅前で暇そうに乗待ちしていたタクシーの運転手に聞くと「ここは無人駅だから切符は列車の中で買えばいい」といった。

駅舎は立派なコンクリート造りなのだが、無人の改札を通過して、一度地下道を通ってホームに出た。屋根のある長いホームには誰もいない。吹き抜けのホームの周りは、春の光を浴びる野山が広がっていた。

ホームにあった時刻表を見ると、1時間1本で11時過ぎの列車は出た後で、次は12時過ぎまでなく、40分ほどもホームで待つことになった。

長いホームの中央に、背中合せで設置されている木製のベンチは、塗料もずいぶん剥がれ落ちていて、そこに座りながら、往時はこのホームも人であふれ、駅舎では観光客を送迎する宿の番頭さんで賑やかだったのだろうことは想像できた。これも車時代の観光地の景色なのだろう。

気温も上がってきて、ホームを吹き抜ける風が気持ちよく、輝く緑の風景を眺めていると、列車を待つことが楽しくもあった。

それより東京への切符をどこで買うかと考えていた。まさか列車の中で新幹線の切符は無理だろうと、2駅先の旅の最初に下りた伊勢市駅で下り、切符を買って、1時間後の列車に乗ればよかった。

伊勢市駅へ向かう列車の車窓からの景色は、明るく輝いていた。伊勢の神々は、この美しい景色の中を渡る風を、私の心のなかに吹き渡らせてくれたようだった。「無事に帰れよ」神の声を聞いた気がした。